

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：32610

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K21363

研究課題名(和文)英語教育と連携した日本語教師養成プログラム開発のためのデータベース構築と教育実践

研究課題名(英文) Database construction and classroom practice in the development of a JSL teacher training program as a collaborative project with English Education

研究代表者

嵐 洋子 (Arashi, Yoko)

杏林大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90407065

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1)日本語クラスの録画調査、及び、2)日本語教師及び学生に対するアンケート調査を実施した結果、1)英語を使用した授業にも様々な違いがあるが、英語表現や使用目的には共通点があること、2)教師の多くは英語使用に関して賛成でも反対でもないが、日本語習得への影響や自身の英語力の不安から、英語使用に消極的な意見も見られたこと、3)学習者の多くは英語使用に賛成だが、考え方や行動には違いが見られたことが明らかになった。媒介語使用が不安克服につながっている学習者がいることから、教師は媒介語使用に柔軟に対応する必要があるが、媒介語使用以外の方略により学習を進められる環境も整えることが重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、1)英語を用いた日本語クラスの録画調査、及び、2)日本語教師及び学生に対するアンケート調査を実施した。その結果、1)英語を使用した授業にも様々な違いがあるが、英語表現や使用目的には共通点があること、2)教師の多くは英語使用に関して賛成でも反対でもないが、日本語習得への影響や自身の英語力への不安から、英語使用に消極的な意見が見られたこと、3)学習者の多くは英語使用に賛成だが、考え方や行動には違いが見られたことが明らかになった。多様化する日本語学習者に対応するために、媒介語として英語を効果的に用いた日本語教育の方法について考察したことは、意義のあるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, 1) videos of Japanese lessons given in English were collected for analysis and to gather useful English expressions, 2) Questionnaire surveys were conducted among teachers and students to understand their beliefs towards using English in the classroom. The results were 1) The Japanese lessons conducted in English differed in approach but were similar in terms of the purpose and use of English. 2) Most teachers are ambivalent about using English because it depends on class conditions. But many teachers have negative feelings about using English because of concerns about students' acquisition of Japanese and their own English ability. 3) Most learners agree with using English but have different beliefs about the learning strategies. English helps learners to understand Japanese, and reduce anxiety so teachers need to be flexible. Some students use strategies other than using English, so teachers need to balance the use of Japanese and English and reduce anxiety in other ways.

研究分野：日本語教育学

キーワード：媒介語 日本語教育 教授法 アプローチ 母語

1. 研究開始当初の背景

日本語教師養成課程では、日本語で教えるいわゆる直接法による指導法を教えるのが一般的である。実際、特に国内では多国籍のクラスで教える可能性も高く、直接法での指導法を身に付けておく必要がある。一方、海外では、学生の母語を使用する場合も多いほか、国内においても、近年、特に大学機関において英語を媒介語として教えるコースが増えてきている。媒介語の使用について、横溝(1992)では、媒介語を使用する望ましいケースとして「学習者の理解を深めるために、文法、語源、社会的・文化的背景等を学習者の母語で説明していくケース」を指摘している。また、顔(2001)では、台湾人日本語教師が学習者の母語をどのような形で媒介語として使用しているか調べ、その内容を分類している。しかし、英語を媒介語として効果的に用いた指導法の研究や実践、日本語教師養成プログラムの開発は十分に行われているとは言えない状況である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語教師養成プログラムと大学における英語教育分野が連携し、日本語だけでなく、英語で日本語指導を行うことができる日本語教師養成プログラムの開発を行うことである。前述の通り、英語を柔軟に、効果的に用いた指導法の研究や実践、日本語教師プログラムの開発は十分に行われているとは言えない。そこで、本研究では英語を効果的に用いた指導法を探るためのデータベースを構築するとともに、そのデータ結果をもとに英語教育分野と連携し、日本語だけでなく、英語で日本語指導を行うことができる日本語教師養成プログラムを考案する。

3. 研究の方法

(1) 英語で行われている授業の録画

国内外の大学機関において、英語も用いて行われている日本語の初級及び中級前半の授業を以下の通り録画した。録画した授業は全て書き起こし、英語表現及びその機能別に分類するとともに、一部のデータは顔(2001)を参考に英語表現の詳しい分析を行った。Tは教師、Sは学生、NJは日本語母語話者、NNJは非日本語母語話者(英語母語話者)、レベルのBは初級、Iは初中級を表している。

表1 動画データ

	海外 F/国内 J	T: NJ / NNJ	Time(min)	S: level
1	F	NNJ	52	B
2	F	NNJ	37	B
3	F	NNJ	50	B
4	F	NNJ	50	B
5	F	NJ	50	B
6	F	NJ	50	B
7	F	NJ	50	I
5	J	NJ	90	I
6	J	NJ	90	I
7	J	NJ	90	I
8	J	NJ	36	B
9	J	NJ	58	B

(2) 教師に対するアンケート

国内外の日本語教師を対象に調査協力依頼を行い、Web上に設置したフォームを通じてアンケートに回答してもらった。43名から回答を得た。アンケート調査の内容は(a)学生の英語使用(教室での使用頻度、使用場面、使用に対する意見)、(b)教師の英語使用(教室での使用頻度、使用場面、使用時の工夫、使用に対する意見、困難点)14項目、(c)フェイスシートである(嵐洋子、倉林秀男、阿部新他 2019)。

(3) 学生に対するアンケート

調査はウェブ又は質問紙(全て英語)を用いて行った。調査対象者は、国内外の高等教育機関で学ぶ日本語学習者で計 86 名である。国内は 51 名(うち短期滞在者は 32 名)、海外は 35 名であった。ウェブでの調査では、教室において被調査者がコンピューターを用いて回答し、質問紙での調査では、教室において質問紙を配布し回答した。調査内容は 4 分野からなり、A「日本語学習全般に関するピリーフ」、B「学習スタイル・学習ストラテジーに関するピリーフ」、C「学習に関する不安」、D「教室での英語使用について」である。ピリーフ(A, B, C)の 38 項目は、1 が「強く反対」、5 が「強く賛成」のリッカート尺度で回答してもらった。D の 8 項目は選択式、2 項目は自由記述式で回答してもらった(嵐他 2020)。

4. 研究成果

(1) 英語で行われている授

表 2 動画分析例
(嵐洋子, 倉林秀男, 田川恭識 2019)

顔(2001)同様、書き起こした発話を 3 秒ごとに区切り、使用言語、母語使用カテゴリー(顔 2001:30)を付与した。右の表は分析例である(嵐洋子, 倉林秀男, 田川恭識 2019)。英語の使用が日本語よりも多かったのは、「内容伝達」「漢字の説明」「文法の説明」「言語構造の日英対照比較」「単語の定義・説明」「表現の用法の説明」で、言語構造の対照比較や文法の説明は、顔(2001)でも上位に見られた使用項目である。横溝(1992)も文法の説明は、学習者の理解を深めるものとして、母語の有効な使用のケースの一つとして挙げている。

例 1 言語構造の日英対照(「上」について)

T: I've got it in my head, Japanese makes fine distinctions where English does not...So, it puzzles that something could be on the table or, levitating above the table and you don't distinguish, you don't change the preposition. (嵐洋子, 倉林秀男, 田川恭識 2019)

英語表現の分類では、「意味を確認する」「あてる」など、より教室における実際の使用面を考慮した分類を行った。例えば、文法の説明における indicate(例「は」indicates the topic of a noun)や、学習者に確認をする際の「How would you say~」、これから何をするのかを明確にするための「We are going to talk about~」、大事なポイントを伝える「please note that~」などである。

教授行動	英語	日本語
漢字の説明	11.4	0.3
学習者の質問への回答	8.6	0.0
文法の説明	6.6	0.0
授業の手順の説明	4.8	1.4
リラックスした雰囲気作り	4.1	0.7
言語構造の日英対照比較	3.1	0.0
理解度の確認のための質問	2.4	1.0
学習者の誤りの訂正・説明	2.4	0.0
単語の定義・説明	1.7	0.3
表現の用法の説明	1.7	0.0
教室運営の情報提供	0.7	0.0
学習内容に関する質問	0.7	0.0
理解不足の聞き返し	0.7	0.3
授業進行・基本的な指示	2.1	21.0
練習の説明や指示	7.6	9.7
賞賛や勇気づけ	1.0	4.1
教師の独り言	0.7	0.7
計	60.3	39.7

(2) 教師に対するアンケート

学生の英語使用に関して、約 8 割の教師が、教師に対して「よく」あるいは「時々」使用すると回答し、その使用場面については「授業内容に関する質問」が最も多かった。教師に対する英語使用及び学習者同士の英語使用に関して賛成か反対か尋ねたところ、どちらも「賛成でも反対でもない」と答えた回答が最も多く、その理由として、条件(レベル, 理解促進, タスク)によるという回答が多かった(嵐洋子, 倉林秀男, 阿部新他 2019)。

教師の英語使用に関しても、約 7 割の教師が「時々」あるいは「よく」と回答し、その使用場面については、文法、語彙や表現の説明や、授業運営に関する説明、学生からの質問への返答が多かった。このような教師の英語使用に関して、賛成か反対か尋ねたところ、

「賛成でも反対でもない」という回答が最も多かった。その理由としては、学生と同じく、「条件」(個人の資質, レベル, 場面, クラス, 状況, カリキュラム, 学習環境など)によるという回答が多かったが, 自由にコメントを求めると, 学生の英語使用より, 学習者への影響や自身の英語力への不安等から, どちらかといえば消極的な考えを持つ教師がさらに多いことが示唆された(嵐洋子, 倉林秀男, 阿部新他 2019)。

(3) 学生に対するアンケート

無回答のあるデータ等, 分析対象外としたデータを除き, 62 名分の回答について, 因子分析, 及び, 回答者の属性による尺度平均値の有意差について分析を行った。

その結果, 今回, 調査対象とした学習者のピリーフ(日本語学習全般, 学習ストラテジー, 学習不安)の潜在的因子として, 第1因子「日本語を話すことへの不安」, 第2因子「日本語の理解への不安」, 第3因子「言語学習に重要なこと」, 第4因子「学習動機の強さと情意コントロール」, 第5因子「個人による学習活動への積極性」の5つの因子があることが分かった。また, これらのうち回答者の学習環境や日本語のクラスのレベルによる違いがあるのは, 第4因子, 第5因子であるという結果が得られた(嵐他 2020)。

さらに, 本調査の回答者はほとんどが教師の英語使用に賛成し, 教師に英語を使用すると答え, こういった教室での英語使用に対する考え方や行動の違いは第5因子にのみ見られた。どちらの因子も学習方略に対するピリーフに関する因子だが, 第4因子は学習動機が強く, 日本人との交流や日本と関わりを持つことへの積極性を示しつつ, 情意面のコントロールをしようとする意識が強く, 国内, 初級の学習者がより賛成していた一方, 第5因子は, 理解できるまで調べたり, クラスメイトと練習するなど, 日本語学習によって足りない日本語力を補うことへの積極性を示すもので, 短期滞在中の学習者や, 英語使用頻度が少ない学習者が賛成していた(嵐他 2020)。

教室での教師の英語使用については「賛成」(55%)「強く賛成」(24%)で全体の約80%を占め, 理由としては学習や理解の助けになるからといった意見や, 気持ちを落ち着かせるのに役立つといった意見が見られた(嵐他 2020)。

これらの結果から, 教師は教室での媒介語使用に柔軟に対応する必要があるとともに, レベルや学習環境も考慮しながら, 教室における媒介語と日本語の使用のバランスを考えていくことが大切であると考えられる。

参考文献

- 嵐洋子, 倉林秀男, 阿部新, 田川恭識, アダムスジョージ, ワー由紀(2019)「日本語教育における媒介語としての英語使用」『杏林大学研究報告』36巻:13-25.
- 嵐洋子, 倉林秀男, 田川恭識(2019)「入門・初級の日本語授業における媒介語としての英語使用の実態 授業動画の分析を通して」『日本語教育方法研究会誌』25巻2号:34-35.
- 嵐洋子, 阿部新, 田川恭識(2020)「初級日本語教育における媒介語としての英語使用 学習者向けアンケート調査の結果から」『2020年度春季日本語教育学会大会予稿集』
- 顔幸月(2001)「台湾人日本語教師の母語使用に関する基礎的研究: 会話授業の分析を通して」『世界の日本語教育』第11号, 17-37.
- 横溝紳一郎(1992)「クラスで使う英語: 学習者の母語をどの程度用いるか」『月刊日本語』9月号:13-15.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 嵐洋子、倉林秀男、阿部新、田川恭識、アダムスジョージ、ワー由紀	4. 巻 36
2. 論文標題 日本語教育における媒介語としての英語使用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 杏林大学研究報告	6. 最初と最後の頁 13 - 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 嵐洋子	4. 巻 30
2. 論文標題 日本語教育における媒介語の使用について：文法訳読法からコミュニカティブ・アプローチまで	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 杏林大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 135-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 嵐洋子、阿部新、田川恭識
2. 発表標題 大学の英語教育と連携した日本語教師養成プログラムの開発 初級日本語教育における媒介語としての英語使用
3. 学会等名 日本語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 嵐洋子、倉林秀男、田川恭識
2. 発表標題 入門・初級の日本語授業における媒介語としての英語使用の実態 授業動画の分析を通して
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 嵐洋子, 阿部新, 田川恭識
2. 発表標題 初級日本語教育における媒介語としての英語使用 学習者向けアンケート調査の結果から
3. 学会等名 日本語教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考